様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５２８４０７６

研究課題名（和文）変形漢字と変用漢字の類型研究

研究課題名（英文）A classification study of Unique Forms and Usages of Chinese Characters

研究代表者
吉川　雅之（YOSHIKAWA, Masayuki）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：３０３１３１５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,900,000円

研究成果の概要（和文）：漢字文化圏の南方周縁部である中国南部からベトナムにかけて分布する諸言語には、字形や字音・字義が中国の官製の字典や韻書に収録されていない、独特な漢字が見られる。本研究では、これらに対して「変形漢字」（新造字）と「変用漢字」（代替字）という暫定的呼称を与え、その構造と変化について、通言語的な視点から分析と考察を進めた。研究対象には、ベトナム語、タイー語、チワン語、トン語といった非漢語だけでなく、粵語や客家語のような漢語系も含まれる。これら諸言語について、変形漢字がどの様な造字法に基づいているか、そして変形漢字と変用漢字が時代とともに、または媒体によってどの様に変化するかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Among the languages distributed from South China to Vietnam, the southern peripheral edge area of the cultural sphere in which Chinese characters were and are still being used, Chinese characters with unique shapes and usages can be found in some manuscripts and books. However, these unique characters and usages are not recorded in the traditional Chinese dictionaries officially issued in China. In our study, we provisionally refer to the Chinese characters with unique shape as henkei kanji, and those with unique usages as henyou kanji, and have observed and analyzed their structure and change from a cross-language perspective. The subject of our discussion is not limited to the historical documents in non-Sinitic languages, but also includes the various materials in Sinitic languages. We have shed light on the manner in which the henkei kanji are constructed and the mechanism behind their change over time, as well as the difference between their shapes over different media.

研究分野：中国語学

キーワード：文字　漢字文化圏　ベトナム語　タイー語　チワン語　粵語（広東語）　チュノム　方言字

１．研究開始当初の背景

漢字文化圏の東方周縁部である日本で「国字」や「万葉仮名」が誕生したように、歴史的に漢字文化圏の南方周縁部に位置した中国南部からベトナムでは、現地の音声言語を表記するために、字形の新造する、或いは本字でない別の字を当てるといった手段が用いられてきた。字形や用字（字音・字義）が既存の漢字体系から逸脱したこの種の漢字、即ち新造字や代替字は、宗教文書や文芸文書をはじめ様々な媒体に現れる。

この種の独自の漢字に対しては、従来言語毎に別個に研究が進められたことはあったが、通言語的な研究は為されてこなかった。例えば、漢語系諸語では「方言字」、ベトナム語では「字喃（チューノム）」という呼称の下に、各々完結した文字群として扱われてきた。中国語学では、それらを俗字の一種と見なし、本字や語源の考証を好む傾向が見られる。そして、中国のミエン語やベトナムのヌン語の様に、独自の漢字に関する研究が未着手と言ってよい状況に在る言語すらも存在する。

この様な状況に臨み、言語間の壁を取り払い、字形と字音・字義についての通言語的な類型化を試み、「既存の漢字体系からの逸脱とは何か」を問うべく、本研究は企画された。南方周縁部の諸言語には漢語系と非漢語の両方が含まれるものの、類型特徴は概ね共有されている。よって、その中で字形と用字（字音・字義）について共通点が見られるか否か、また相違点としては如何なるものが見られるかは、既存の漢字体系からの逸脱のメカニズムを理論付ける試金石となると期待される。

２．研究の目的

中国南部からベトナムにかけての諸言語で用いられている（一部の言語については「用いられていた」）、字形や字音・字義が中国の官製の字典や韻書に収録されていない漢字に対して、同一の基準に基づき、類型学的特徴を解明することと分類することが本研究の目的である。

類型学的特徴の解明は 2 つに細分される。一つは文字構造と構成要素についての類型化であり、独自の字形を呈する新造字が対象となる。もう一つは、異なる時代や異なる媒体に見られる字形の差異についての類型化であり、字形変遷の類型化と称してもよい。これは新造字と独自の用字（字音・字義）による代替字の両方が対象となる。

尚、本研究は「日本も含む、漢字文化圏の四方周縁部に於ける漢字の発展」を将来の発展的課題としうる視座を持つ。そのため、中国南部やベトナムの言語についての研究者だけでなく、文化人類学、歴史学、そして日本語学の専門家から成る学際的研究組織を以て臨む。

３．研究の方法

本研究では、次の 5 つの段階を設けて研究を進める。

(1)変形漢字・変用漢字を含む文献の捜査・収集
(2)変形漢字・変用漢字の分析・考察
(3)変形漢字の客観的な記述方法の確立
(4)字形の時代差や媒体差の検証
(5)通言語的な比較と類型化

内、(1)(2)(4)は言語ごとに作業を行う。その詳細については下記「４．研究成果」に記す。

尚、考察対象を明示にするために、独自の字形を呈する新造字に対しては「変形漢字」、独自の用字（字音・字義）による代替字に対しては「変用漢字」という名称を暫定的に使用する。例えば、チワン語に於いて「スッポン」（音価は[pa]）を表す「爪魚」は変形漢字であり、「爬」は変用漢字（同音による代替字）である。「変形漢字」と「変用漢字」という呼称は、西田龍雄氏が『言語学大辞典世界文字辞典』(2001 年）で既に提唱している概念であり、それに従うものである。

４．研究成果

研究期間の 3 年間に行った研究活動と、得られた研究成果は、次のとおりである。

(1)言語毎の変形漢字・変用漢字の捜査・収集と分析・考察：

① 粤語（即ち広東語）　(担当者：吉川)
② 客家語　(同：吉川)
③ 呉語の上海方言　(同：張)
④ ベトナム語　(同：清水、伊澤)
⑤ タイー語　(同：清水、佐藤、讃井)
⑥ トン語　(同：兼重)
⑦ タイ語　(同：ダニエルス)

①～③は欧州や香港の図書館に所蔵されている第二次世界大戦以前の版本や抄本、④は主に 20 世紀初頭に刊行された字喃文・漢文・ローマ字の混在する版本、⑤はベトナムのカオバン省ホアアン県で発見した抄本、⑥は中国の広西壮族自治区三江県の墓碑銘や碑文、⑦は中国の雲南省の諸機関に所蔵されている抄本や版本、を対象として進められた。

それ以外に、吉川は中国の湖南省で書写されたミエン語（ヤオ族）の宗教文書にも独自の字形が見られ、その中にはチワン語の変形漢字と字形が偶然相似するものが含まれていることを確認した。

(2)変形漢字の客観的な記述方法の確立：

変形漢字には、未だユニコードで表示することができない字形が少なくない。そこで本科研では、文字構造と構成要素の記述方法を検討した。そして、平成 25 年に濱田と鷲澤によって草案が提示された。その概略は次のとおりである。

一般的な文字コードで表示可能な構成要素にまで、変形漢字を分解する。分解に際し

ては、構成要素同士の位置関係の情報を保持するために、字全体もしくは構成要素は2つに分解されることを原則とし、得られた構成要素の組を字形の記述に直接用いる。そして分解方法を括弧とローマ字を用いて表記する。

(3)字形の時代差や媒体差の検証
① 粵語　　（担当者：吉川）
② 客家語　　（担当者：吉川）
③ タイー語　　（担当者：清水）
①では、粵語（即ち広東語）について現在代表的と思われている変形字形の中に、19世紀後半に初めて登場する字形が含まれていること、そして当時は媒体によってはその新来の字形では記されていない場合が有ることが分かった。③では、ベトナム語について15世紀の資料では 18 世紀に比べて変形漢字の例が限られ、変用漢字が主流であることが明らかとなかった。

(4)通言語的な比較と類型化：
① 粵語と客家語　　（担当者：吉川）
② 粵語と閩南語　　（同：吉川）
③ ベトナム語とタイー語（同：清水、讃井）
④ タイー語とチワン語（同：清水、讃井）
客家語の変形漢字・変用漢字については、プロテスタント教会・宣教師によって粵語の変形漢字・変用漢字が模倣されたことが通説となっているが、①ではそれを立証できない字例が存在することが分かった。②は第二次世界大戦以前ではなく現代について、インターネットに於ける文字表記を対象として考察を行ったものであるが、香港粵語と台湾閩南語の間には、文字として表記する段階で既に根本的な違い存在するという結論が得られた。③と④では、タイー語の変形漢字について、ベトナム語の字喃と字形が共通するものや、タイー語の変形漢字・変用漢字の基礎となる漢字音がベトナム漢字音をベースとするものが主流を占めることを明らかにすると同時に、明らかにチワン語の変形漢字・変用漢字に通ずる例も存在することを指摘した。

以上の比較と類型化に関する考察は、②と③が既に学術誌に論文として掲載された。①と④については現在論文を執筆中である。

(5)国際シンポジウムの開催：
研究開始当初に予定していたとおり、最終年度である平成 27 年度には変形漢字・変用漢字を主題とした国際シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」を開催した。会場は大阪大学（2016 年 3 月 21 日）と東京大学（同 23 日）である。

このシンポジウムでは、漢字文化圏の南方周縁部である中国南部からベトナムにかけて見られる漢字の変形と変用に焦点を当て、そのダイナミズムを明らかにするだけでなく、独自の字形や用字が創造される場合、そして変化する場合、そこに通言語的な規則は見出しうるのかという問いまで射程に入れた学術交流を試みた。

分担者である清水と、海外の研究協力者 3 名、計 4 名の研究者がそれぞれ、独自の漢字がどの様に創られ、どの様に変化していくか、そして独自の漢字は誰によって使用されているのかについて、水準の高い講演を行った。

講演者と主題は下記〔学会発表〕の欄に記した①～⑧である。主な考察対象として取り上げられた言語は、ベトナム語、タイー語、南部チワン語、粵語の 4 種である。講演時間はいずれも 1 時間、それに続いく質疑応答時間は 20 分であったが、4 講演とも活発な質疑応答が行われた。

特に、中越国境を挟んで分布する、近縁関係に在るタイー語と南部チワン語を扱った 2 講演は、このシンポジウムの核心と言うべきもので、タイー語の独特な字形が南部チワン語のそれからベトナム語のそれに置き換えられた可能性が提示された。正に、文字についてタイー語には南部チワン語と共通の「基層」が存在したことが示唆されたとも言え、今後の展開が大いに期待される。

また、総括討論では、中国南部からベトナムにかけての変形漢字と日本の国字、更には 11～13 世紀に漢字文化圏の西北周縁部で使用された西夏文字との類型論的な相違について、来場者から指摘がなされた。これは、漢字が南方周縁部、東方周縁部、西北周縁部で遂げた発展の根本的な違いを突いた、究極の問いでもある。それに対して、講演者から各周縁部の音声言語の類型的な差異に帰する可能性を指摘する見解が示されただけでなく、別の来場者からは漢字に対するシンパシーの濃淡を指摘する意見も提示された。

それ以外にも、相異なる 4 言語の専門家が一堂に会する得難い機会ともなったことに対して、来場者から多くの賛辞が寄せられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① 笹原 宏之 他、会意によらない一つの国字の消長、国語文字史の研究、査読無、No.15、2016、pp.65-83
② 兼重 努、無形文化遺産をめぐるせめぎあい――トン族大歌の事例から、国立民族学博物館調査報告、査読有、No.136、2016、pp.21-50
③ SHIMIZU Masaaki、A Reconstruction of Ancient Vietnamese Initials Using Chư Nôm Materials、国立国語研究所論集、査読有、No.9、2015、pp.135-158
④ 兼重 努、移動する宗教的職能者、請来される神々――西南中国トン族村落社会の事例から、京都大学 CIAS（地域研究統合情報センター）Discussion Paper Series、査読無、

No.47、2015、pp.27-43
⑤ 清水 政明、ベトナム・カオバン省タイー族字喃に関する初歩的考察、Ex Oriente、査読無、No.22、2015、pp.61-84
⑥ 吉川 雅之、馬士曼所記録之粵語音――十八世紀末的澳門方言、Journal of Chinese Linguistics、査読有、Vol.42、No.2、2014、pp.431-460
⑦ 吉川 雅之、レッグ編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系、東洋文化研究所紀要、査読有、No.165、2014、pp.119-157
⑧ 吉川 雅之、ウェブサイトにおける音声言語の書記――香港粵語と台湾閩南語の比較、ことばと社会、査読有、No.15、2013、pp.12-40
⑨ 吉川 雅之、ドイツの博物学者が一八二二年に記した粵語音、中国語学、査読有、No.260、2013、pp.93-112
⑩ DANIELS Christian 、Introduction: Upland Peoples in the Making of History in Northern Continental Southeast Asia 、Southeast Asian Studies、査読有、Vol.2、No.1、2013、5-27

〔学会発表〕（計 19 件）
① ロバート バウワー、Hong Kong’s Written Cantonese: Processes, Basic Principles, and Problems to be Resolved、シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」、2016 年 3 月 23 日、東京大学駒場 I キャンパス（東京都・目黒区）
② 戴 忠沛、Historical Transformation of Zhuang Characters: Illustration from the Manuscripts of Yang Zhuang Speaking Area、シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」、2016 年 3 月 23 日、東京大学駒場 I キャンパス（東京都・目黒区）
③ 清水 政明、タイー字喃の発展におけるベトナム字喃の役割、シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」、2016 年 3 月 23 日、東京大学駒場 I キャンパス（東京都・目黒区）
④ グエン ティ オワイン、ベトナムの漢籍における俗字、略字現象とその字喃の構造への影響、シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」、2016 年 3 月 23 日、東京大学駒場 I キャンパス（東京都・目黒区）
⑤ ロバート バウワー、Hong Kong’s Written Cantonese: Processes, Basic Principles, and Problems to be Resolved、シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」、2016 年 3 月 21 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府・豊中市）
⑥ 戴 忠沛、Historical Transformation of Zhuang Characters: Illustration from the Manuscripts of Yang Zhuang Speaking Area、シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」、2016 年 3 月 21 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府・豊中市）
⑦ SHIMIZU Masaaki、The Role of Vietnamese Nom in the Development of Tay Nom、シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」、2016 年 3 月 21 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府・豊中市）
⑧ グエン ティ オワイン、ベトナムの漢籍における俗字、略字現象とその字喃の構造への影響、シンポジウム「東アジア諸言語の漢字：変形・変用の創造と標準化」、2016 年 3 月 21 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府・豊中市）
⑨ KANESHIGE Tsutomu 、Diffusion of knowledge with the movement of experts among settled village communities: a case study of the Dong people in Southwest China、2015 Annual Conference of the East Asian Anthropological Association、2015 年 10 月 3 日、National Chengchi University（台北（台湾））
⑩ SHIMIZU Masaaki、On the history of initial consonant clusters in Cao Bang dialect of Tày Through the analysis of Nôm Tày scripts、International Conference on “the Linguistics of Vietnam: 30 years of Renovation and Development”、2015 年 8 月 23 日、ベトナム社会科学アカデミー言語学院（ハノイ（ベトナム））
⑪ 兼重努、定住的村落社会における専門家の移動と文化の伝播――西南中国トン族の民間芸能の事例から、日本文化人類学会第 49 回研究大会、2015 年 5 月 31 日、大阪国際交流センター（大阪府・大阪市）
⑫ 兼重 努、無形文化遺産登録をめぐるせめぎあい――トン族大歌の事例から、国際フォーラム「中国地域の文化遺産――人類学の視点から」、2015 年 1 月 24-25 日、国立民族学博物館（大阪府・吹田市）
⑬ 吉川 雅之、リンガフランカとしての「官話」の諸相、多言語社会研究会第 8 回研究大会、2014 年 12 月 6 日、名古屋市立大学（愛知県・名古屋市）、招待講演
⑭ SHIMIZU Masaaki、Henri Maspero va Nganh Nghien cu’u Lich su’ Ngu’ am Tieng Viet、Vien Vien Dong Bac Co va cac nganh khoa hoc xa hoi nhan van Viet Nam、2014 年 12 月 5 日、ハノイ人文社会科学大学（ハノイ（ベトナム））
⑮ 吉川 雅之、一八二八年のカテキズム手稿本に記された粵語音、日本中国語学会第 64 回全国大会、2014 年 11 月 16 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府・豊中市）
⑯ 吉川 雅之、十九世紀初期的一個莞寶片方言――通過德文資料試探其詞彙特徴、18th International Conference on Yue Dialects、2013 年 12 月 7 日、香港科技大學（香港（中国））
⑰ 吉川 雅之、ゴンサルベスの記した粵語方言、日本中国語学会第 63 回全国大会、2013 年 10 月 27 日、東京外国語大学（東京都・府中市）
⑱ 吉川 雅之、有關十九世紀前期的一個閩南

語方言、The 21th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics、2013 年 6 月 8 日、台灣師範大學（台北（台湾））
⑲ SHIMIZU Masaaki、The place of Quang Nam dialect in the history of velar finals in Vietnamese、International Conference on the Linguistics of Vietnam in the Context of Renovation and Integration、2013 年 5 月 11 日、Institute of Linguistics（ハノイ（ベトナム））

〔図書〕（計 6 件）
① 廣田 律子、吉川 雅之 他、大学教育出版、ミエン・ヤオの歌謡と儀礼、2016、347(73-192)
② 吉川 雅之、倉田 徹 他、明石書店、香港を知るための 60 章、2016、394（40-44, 261-265）
⑥ 内田慶市、笹原 宏之 他、関西大学出版部、東アジア言語接触の研究、2016、440(1-39)
③ 吉川 雅之、白帝社、香港粵語［基礎語彙］、2015、240
④ 武内 房司、塚田 誠之、兼重 努 他、風響社、中国の民族文化資源――南部地域の分析から、2014、436(331-400)
⑤ ダニエルス クリスチャン、言叢社、東南アジア大陸部――山地民の歴史と文化、2014、349

〔その他〕
ホームページ
http://www.ac.cyberhome.ne.jp/~hongkong-macao/index.html

http://www.ac.cyberhome.ne.jp/~hongkong-macao/grant-in-aid_2013-2015.html

６．研究組織
(1)研究代表者
吉川 雅之（YOSHIKAWA, Masayuki）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：30313159

(2)研究分担者
清水 政明（SIMIZU, Masaaki）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：10314262

兼重 努（KANESHIGE, Tsutomu）
滋賀医科大学・医学部・准教授
研究者番号：80378439

ダニエルス クリスチャン（DANIELS, Christian）（平成 26 年 12 月まで）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授（平成 26 年 12 月まで）
研究者番号：30234553

(3)連携研究者
笹原 宏之（SASAHARA, Hiroyuki）
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：80269505

岩月 純一（IWATSUKI, Junichi）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：80313162

(4)研究協力者（日本国内）
佐藤 トゥイウェン（SATO, Thuy Uyen）
大阪大学・大学院言語文化研究科・特任研究員
濱田 武志（HAMADA, Takeshi）
東京大学・大学院人文社会系研究科・博士課程
張 玥（ZHANG, Yue）
東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程
鷲澤 拓也（WASHIZAWA, Takuya）
東京大学・大学院人文社会系研究科・博士課程
伊澤 亮介（IZAWA, Ryousuke）
大阪大学・大学院言語文化研究科・修士課程
讃井 綾香（SANUI, Ayaka）
大阪大学・大学院言語文化研究科・修士課程
サントス ミゲル コルティソ ドス（SANTOS, Miguel Cortiço dos）
東京大学・大学院総合文化研究科・修士課程
三村 一貴（MIMURA, Kazuki）
東京大学・文学部・学部

(5)研究協力者（海外）
ロバート バウワー（BAUER, Robert S.）
香港大学・文学部・名誉教授
グエン ティ オワイン（NGUYEN, Thi Oanh）
ベトナム社会科学アカデミー・漢喃研究所・准教授
戴 忠沛（TAI, Chung-pui）
香港大学・教育学部・専任講師